

四月作品

月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

結滞

小嶋 一郎 佐賀

月照れどまぶしくはなく何やかや物不足なる歳が暮れゆく
われよりもひと月早き生まれ日の友は逝きたり一月二日

このわれに煙草やめよと諭しぬし生真面目友が逝きてしまひぬ
十拍に一、二度はある結滞に馴れて寝てゐるあした目覚めて
一日に三度の食後に飲む菓合はせてけふも二十三錠

アボカド

故後 藤 美 子 北海道

大木に鈴生りと聞くアボカドの花をまだ見ず黄なるその花
収穫をめざさず艶ある葉をめでて北国の窓にアボカドを育つ
アボカドは大木にあまたの実を着くと 仰ぎ見たしも緑濃き実を
わさび加へとも和へにせるアボカドの熟度ふさへる味のよろしさ
薄切りを山葵醤油につけて食むとほき国より来たるアボカド

引く

風間 博 夫 千葉

新聞のテレビ番組表の載るページわが家のひとひの宝

眉を引く「明鏡」を引くプルタブを引く赤ら引く子の手を引きぬ

封筒の中の資料も封筒も資源ごみなりわれ宛なれば

われに掛けし生命保険の保険料徐々に上げ徐々に下げ今は千円
たつぷりのモヤシ、ほどほどニラとレバ旨しレバニラここ町中華

荻窪の家

小島 な お*東京

それぞれにまだ家があり改札に別れてしまえば蠟燭の芯

あかるさよ二粒白い錠剤を手にしたまま窓の初雪

紫の数珠に触れれば触れてくる子どもの湿る手のような、あの
耳があり、しかし何にも聞こえない 雪の窓辺の陶器の花瓶

納豆の糸をたぐって手に入れたようなふたりの荻窪の家

☆

☆



水島晴子 兵庫

食事とる老いらのかたへ飾り置く赤き毬爆ず破裂音鋭し
「このあたり鬼蓮泛ぶ池だった」遊園地跡の道べに言へり
一望の枯れ色となる峽のくち棘の木に実は熾火のごとし
疾風に吹きちぎられてまろびある楠の小枝に珠の実ひそか
彩ふかき手づくりの花送り来つこの年に伴侶見送りし友

武田弘之 神奈川

戦なき日本安閑としてをれず年初より能登大地震起こる
虫眼鏡当てて目守れど齡なるやルビの「え」と「え」の区別がつかぬ
老人と決めつけられてバス代も小児と同じ100円となる
家出してここに逝きにし文豪の名をとどめたり北の駅舎は
歌一首まとまらぬ間にA Iは運び来たりわが昼食を

高野公彦 千葉

この世から所払ひをさるる日を待つとしもなく冬至湯にをり
じつくりと陽に酩酊したる干柿を味はひて年の旦迎ふる
拾ひ読みしつと世間の奥が見えるへしんぶんじかん朝々たのし
記憶力目減り続きて過ぎゆきの悲しみ事もしだいに臆
ゆつくりと下りつついつとも思ふこと老いたる我に階段は鈍器

奥村晃 作* 東京

生きてても暮らしていても囲碁会は来れなくなりし学友らを偲ぶ
九十を超えて月詠を欠かさざる武田弘之を思い北条忠政を思う
〈生の意志〉強く振舞う先輩の(生の証)の歌詠まな我也
老い我の八十八は良しとしてその先に九十が見えてオソロシイ
老若男女それぞれの場でそれぞれに歌にのめり込む(大短歌時代)

森重香代子 山口

独り居はさびしかるかな家ねずみ潜むかしれず ふと思ふなり
甲斐甲斐しく主婦をつとむる娘のそばに安らひてをり晦日のゆふべ
庭石に白々と浮く冬の苔陽の翳るときいたくうつくし
庭隅の葉蘭のそよぎ収まりて一月朔日夕ぐれむとす
ひたざまに胸処にむかひ降る雪に向かひて帰る段丘の径

影山一男 千葉

霞町南星座にて父と見き特撮のなき「宇宙大戦争」
山手線の内がはに住み地名よし狸穴、麻布、高樹町はや
勝手口なきマンションに冬陽さす信ずる明日があるとはかりに
有隣堂ブルーのカバーの文庫本読む人のある車内明るし
てのひらはいまだ若しも蜜柑むく折に気づきて笑み浮かびたる

桑原正紀 東京

住民票請求用紙に印字され「令和」とあれど何年か知らず
元号に二重線引き西暦を記せり元号は義務にあらねば
お役所の文書ことごとく元号を印字せること誰も疑はぬ
西暦で出した書類をひと目みて一瞬あいた間がコワイのだ
民間の文書は元号・西暦のどちらも許容それが正しい

狩野 一男 東京

妻かりき「令和6年能登半島地震」と直ぐに命名されて能登半島地震のあとの二日三日行はれたり箱根駅伝百回中、九十七回出場し優勝するとおもへ今年は

伝統の白地に赤の「C」マークテレビ画面に全然見えず人知れずひそかに強く祈るかな再び動かせ真紅の歴史

宮里 信輝 神奈川

「鳥居原湖畔庭園」に残りある冬と小春を味はひ歩く

鳥居原駐車場満車の状態がどンドン増えむこれから「鳥居原」十時に着けり天気快晴七〇分ほど庭園散歩スマホには3517歩 全「鳥居原」歩行の時間

二〇〇台ほど駐められる「鳥居原」今日のクルマは一〇〇台ほどか

小島 ゆかり 東京

水鳥が車窓に見えてつぶつぶと頭浮くわが胸の水にも水脈ながく水上走る鴨見えて聞きたしよその冬の肉声冬の池車窓を過ぎて潜りたるままの一羽が胸に残りぬ寒き日の激辛カレー 老年性感傷は迎へ撃たねばならぬ具たくさんカレー食べれば思ひ出すだじやればかりの父との夕餉

木畑 紀子 京都

餌皿に十羽二十羽まひおりするすずめのこゑはよろこびの歌

雀らの個体識別かなはねどやんちや、臆病、孤独好きをり

比叡山けふは見えるか見えないかまづ丘に立つ散歩のはじめ遠見なる比叡かすみて目前を冬の蝶舞ふ いまがたいせつ

こはるびの空をしづかながれる雲の速度で老いてゆきたし

島田 暉 神奈川

一葉さへ黄葉残さず散らしたる銀杏大樹の巨人は眠る鈴生りの柿一つなき木の枝を目を覚まさむと懸栗鳴き合ふ人さまは地球を破滅させゆくや銀河の星の光いや増す年末の空忙しなしオーバーのあたたかき白海外へ飛ぶ妻からの誕生ケーキを前に置きケーキの影の皿に歪める

大松 達知* 東京

煩惱がひとつふたつと増えてゆく餃子がみつつよつつと減って席を替えて読み継ぐスターバックスの、辛夷が見える見ようとすれば One sheep, ten sheep, one hundred sheep sleep しずかにしめらせてゆく炭酸のようにあかるく溶けている君の怒りを見てるふりするなんどでも来るとおもってそのあとは行つたことない鳥取砂丘

田宮 朋子 新潟

シベリアより飛び来し花鶏消雪の水の流るる路に群れをりおほつごもり決まつて本をくれる夫ことしは『ときめく鉱物図鑑』歳のよる鉱物図鑑の天青石、銀星石のひかりに遊ぶ年の瀬に積もりし雪をしゆんしゆんと解かして除夜を温き雨ふる零時前きこえはじめる除夜の鐘つく人ごとに強弱のあり

津金 規雄 神奈川

湯にしづむうつそみかつて悩み深き愛にその身を刻まれてありき湯に浮かぶ柚子に触るればあはれあはれ悔恨はそよ香より頭ち來人のこころ読み誤まりし日はありき柚子湯の中にまなこを隠るくもりたる鏡ぬぐははわが若きしむらは頭つか真夜の浴室極まるは年のみならず柚子の湯に顎まで漬かるうつそみもまた

小山 富紀子 京都

初生りの日の晴れがましき思ひるむ熊を寄せると伐られゆく柿
たつぷりと食べて春までゆつくりと眠るしあはせ失ひし熊
雨冠かぶれば辰は震となる甲辰歳大地震へり

めでたげに門松立てし公民館元日の夜より避難所となる
被災地にこの上天気送りたいうらうらうらの京の初春

清水 正子 神奈川

元日の夕さりに誰がおもひしや能登を地震が滅茶苦茶にする
海わたる蝶に出会ひし日の能登路おだやかなりき人も暮らしも
亡き父母の家まもりある友は無事か見舞電話を余震が邪魔す
二億年後の超大陸(アメイジア)めざす地球がまたも身じろぐ
大陸の離合集散の形見なれヒマラヤ出土の化石珊瑚これは

福士りか 青森

町の書店、紀伊国屋書店、ジュンク堂書店つぎつぎ知の蔵が閉づ
弘前にひとつ残れるTSUTAYA書店ショッピングビルのスタバの隣
丸善が閉店するつて早春のつららのやうなガラスペン買ふ
本のもつ重さと匂ひ手ざはりを差し引いて売るネット書店は
優美なるレジスタンスを フランス製ガラスペンにて手紙書きたり

藤野 早苗 福岡

コンビニのおにぎり小さく高くなり今年十三回目の満月

修論を出したよと子よりメール来て大寒真冬の底あたたまる
わたくしが書いたことなき修論を書き上げたのだわたくしの子が
震源よりとほく離れたわが街に津波警報ライン点滅

テーブルのグラスにたひらかなる水を凝視るわが裡の揺れやまぬ水

田中 愛子 埼玉

マスクしてふかぶか帽子かぶれども老いは老いにて席をゆづらる
今ならばわかることあり冬の陽のなかで南の窓をみがきぬ
めがねの上にハズキルーペかけ背を丸めぶつんぶつんと足のつめ切る
モンブランとドウフロマーヂュをお上手にシェアして食べる冬の日の午後
明朝の極寒予報こはくなし故郷に老いた母のをらねば

橘 芳園 新潟

追熟し甘味を増せる果物のごとくにわれは老いざりしなり
とむらひのたびに悩みて書きたりしつたなき法話の下書きを捨つ
経の意味問ふこともなき村人に(他力)を説かむ力なかりき
寺を出て4LDKに越してきて本を買ふなと妻に言はるる
僧辞めて僧衣まとはずなりてより念仏の教へしたしくなりぬ

奥村晃作歌集 令和5年12月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

蜘蛛の歌 コスモス叢書第1232編 六花書林

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七一五-16

大松達知歌集 令和6年1月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

ばんじろう コスモス叢書第1233編 六花書林

連絡先 〒170-0005 東京都豊島区南大塚三二二四-10

マリノホームズ1A 六花書林



水上 比呂美 東京

丸大のボンレスハムのやうな脚クリームパンのやうな手の赤子
正月の八幡神社へ代はる代はる乳母車押すその母、伯母、祖母
「いい、いい、ばあ」を覚えた七ヶ月の子顔にスタイ載せばと取りのく
われ婆はタオル広げて待ちてをり赤子一匹茹であがるのを
這ひ這ひをしたくて顔が重たくて五点倒立してゐる赤子

鈴木 竹志 愛知

真裸を晒し立ちたる落葉樹春への英気を内に潜めて
冬の陽に全身浴をする木々は春への気概漲らせ立つ
御社を守ることくに立ち並ぶ木々は葉を脱ぎ無防備なるも
人間のいとなみなども眺めつつ銀杏は伸びる本殿を越し
黄葉をきれいさつぱり脱ぎすてて気持ちよさげに銀杏は憩ふ

原賀 瓊子 東京

犬の目を覗けば犬はものを言ふ吠えなくなりし子の家の犬
もてあます量ぞ大瓶オロナイン男子に買物たのむべからず
夏の夜は白きレースのからすうりの 晩秋朱の実に垂れてゐる崖
元日の能登半島のおほなみが関東平野と見えはじめたり
畢とある賀状まじづか夏樹氏の卒寿すぎたる筆にてとどく

水上 芙季 神奈川

しなやかに腰、ふくらはぎ撓らせて抱つこすイメージ上の母われ
子のつむじ、子の息遣ひ、風吹いて今年の冬は温かさうね
〈赤ちゃんから大人まで〉といふ尊馬油けつきよく赤ちゃんには使はぬ
ほんたうに「ばあ」と言ふのか赤ん坊連発してをりむごむごと動き
風強き日の赤ん坊は不機嫌で自分の耳をひつぱり続く

大野 英子 福岡

右側に坐れば右に曲がりゆく道見えやがて見えなくなつた
抜いてゆく赤いランプを見るばかり抜かれてなにか安堵しながら
もう暗くなりゆく道をテールランプつけないままの車も過ぎる
過去の私と同じ図柄の賀状来る過去の私から届いたやうな
朝空を点の旅客機が飛蚊症のわちやわちやのなかに紛れて消えた

松尾 祥子 東京

能登地震、二機炎上の辰年の正月三日舅逝きたり
弱音吐かず九十七年生きさきりぬ海兵七十五期なる舅
ありがたう、ありがたうと言ひしかど眠れるやうに逝きてしまひぬ
面瘦せて鼻梁の高き舅なり夫に似たるを棺に見つむ
夫の遺影抱きて兄と妹と炉前に並び舅を送る

鈴木 千登世 山口

津波注意報発令震源より六百キロの彼方の萩に
海上を走りて波が母の住む岸辺に着くはあと一時間半
ああけふは妹がある 海までは百歩足らずの母住む家に
受話器から聞こゆる声のしなやかで確かで今日の母はだいちやうぶ
海に抱り海につながる町なれば他人事ならず被災地能登は

小田部 雅 子 静岡

斉藤 梢 宮城

ひとむらの越前水仙元旦のひかりにゆれてゆれて清き香
無風快晴あをふかきそら突き破りへりの爆音北を指せる
全面を雲おほひたる午後ひとそと色うしなひて寒椿墜つ
国ぢゆうに冷たい雨が降りしきり罪なき人を凍らせてゐる
夜な夜なを怒りのごとく北の窓たく風、この風を記憶す

クリスマス街の正しい歩き方忘れてしまつてわれ骨折す
われもまた自力で生きていることを深く思へり骨折をして
骨折は小さな不運 ギプスして痛みとともに新年迎ふ
地震報道見てゐるだけで無力なり怖いだらうに寒いだらうに
コスモスの仲間が無事であるやうに一月号の歌読む元日

うたを味わう―食べ物の歌 ●高野公彦

四月の味 ― 寿司のいろいろ ―

押すほどに固まりて世もにぎにぎと岩
国寿司に散る紅、緑 今野 寿美こんの すみ

私は四国愛媛で生まれ育ったが、子供のころ食べた寿司は、ばら寿司だった。盥のような大きな平たいお櫃ひらびに、炊きたてのご飯を広げて酢を含ませ、その上に具を乗せてかきまぜる。具はニンジン、ゴボウ、椎茸、卵焼、レンコン、それに小エビである。祭の日など、母がこの寿司を作ってくれるのが楽しみであった(瀬戸内海に面した町だから、小エビは安い食材だった。カレーライスにも、高い肉の代わりに小エビが入

っていた)。

そのあと関東に出て来て、たまに握り寿司を食べるようになった。まあまあ旨いけれど、マグロだけは何の味もしない。あれはマグロではなく、それに似た別の魚だろう。もちろん高い金を出せば本物の旨いマグロが食べられるが、私はそこまでの執着はない。

関西に旅行した時、つい買ってしまふのが押し鮭である。代表的なものは、鯖寿司、いわゆるバツテラ。ほかに、鱒寿司や雀寿司(小鯛を使ったもの)もある。押し鮭は、さほど高くないし、味はすこぶるいい。お

昼どき、押し鮭をつまみながらビールを飲むと、うれしい気分になる。

この歌に出てくる岩国寿司というのは、どんな寿司だろう。押し鮭の一種だろうが、残念ながらまだ食べたことも見たこともない。見た目、華やかな寿司のようだ。「散る紅、緑」とあるので、私は古今集の「見わたせば柳桜をこきまぜて都ぞ花の錦なりける」という歌を思い出した。でも、この京の春景色より更に色あざやかな寿司なのだろう。

背景に岩国の錦帯橋、いかにも旨そうに感じられる寿司である。「世もにぎにぎ」という表現が楽しそうな雰囲気を作り出している。そのうち岩国へ行ったら食べてみたい。歌集『鳥彦』より。